

詩同人誌評

第3回

どんな詩を読みたいか

中塚 鞠子

二年に及んだコロナウイルスの蔓延が突然のように収束してきた。なんとなくまだ信じられない気持ちではいるが、閉塞状態だった世の中が、また詩の世界がどう変わっていくのだろうか見ておきたいと思っている。

最近、詩に対する考え方が少し変わってきた。空想力を駆使した面白い詩が好きだった。しかし、かなり食傷気味になっている。隠されている本能や欲望や意思が、つまり自己が出ていない、知識や幻想の物語詩になんの意味があるだろう。素直な詩にひかれてきている。

今回の詩誌、まだ、コロナ禍の最中である。閉じ込められた家族はどう暮らしていただろうか。社会の最小の単位の家族を探ってみた。

中野徹「ミートソース」(「笛」296号)

コロナ禍で外へも行けず家でごろごろしているところ

家内の命令でミートソースを作らされた五月の連休には珍しく細かい雨の一日だった

少しとうのたつた かすかすのにんにく野菜置き場の暗室で気持ちよく寝ていた玉ねぎ

少し皺の入った年増の人参
三本一〇〇円の安売りで売れ残ったセロリを細かく刻み

ついでにこのところの訳の分からない憂鬱をも刻み
一心不乱に わき目もふらず炒めた

(略)
細かく刻まれたもろもろはみな不機嫌で炒めている私も不機嫌で
不機嫌が不機嫌をいためている格好だった

(略)
何かが足りないかと ミートソースがぶつぶつ言い始める

それは、愛だ 思いやりだ、といわれて、最後に恥ずかし気に“愛情”を吹き込んだ。すると「やっぱりパパのミートソースは絶品

愛情いっぱい」と奥さんは軽々とお世辞。ああ、案外こんなところに幸せが潜んでいるのか、とお二人さんに乾杯。

林良子「やめ家事」(「異郷」57号)

洗濯物を干して たたんで
収納することを やめる

毎日の 掃除機がけを やめる
休日の時間をさいて
作り置き料理を やめる

トイレットペーパーの
取り換えを やめる
(略)

どれも これも 日常の
見えない 名もなき 家事たち
そんなことぐらいが
積もり 積もって

つらいとも 言えず
できない自分を 責めてきた
(略)

家事というのは掃除・洗濯・食事作りだと思っている男は多い。ゴミ出しくらいで家事をやっていると思うんじゃない。作者の言うように名もなき家事が山ほどあるのだ。コロナで家に居てよくよく見ると、判ったはずである。食材・調味料・日用品と不足しないよ

う、買い出しのため頭の中のコンピュータは常に働いている。寒くなった暑くなったと家中の服・布団などの入れ替え。時々反乱も必要だ。

兎丸久「ファスナー夫婦」〔軸〕140号

妻とのいざこざ

つべこべ反論しないで
詩にすることにした

(略)

ばかでない私の
ボタンがわるいのか
きついホルルのせいなのか

(略)

揚げ足とり合う水掛け論
ジグザグ模様の妻と私
ファスナーのように
滑らかにかみ合うまで
詩にすることにした

夫婦なんて、どちらかが我慢していれば採めることはなく、喧嘩にならない。そんな夫婦が多い。しかしそれはおかしい。我慢しないで、意見をぶつけ合ってこそ本当の夫婦になれるのだ。がっちり噛み合って。
ファスナー夫婦なんて理想ではないか。

山下俊子「初夏の風」〔RIVERIE〕177号

.....

若いちがやの穂をしがんで遊んだという
わたしもちがやの穂を食んでみる

なんの味もしなかったが

子どもの頃のあなたの姿が浮かんだ

(略)

なんと長い年月をいっしょに暮らしてきた
のだから

帽子にかくれた白髪

しわ深くなった頬のあたり

遠くの川の流れを見る確かな眼差し

もう少しいっしょにこの人生を歩いてゆけ

そう

さわやかな初夏の風がびつたり老夫婦の
姿が、外連味なく素直に描かれている。

石村勇二「妻の好みに染められて」〔RIVERIE〕178号

夏になると

《暑いのに帽子もかぶらないで》と妻は言う

冬になると

《寒いのにパッチもはかないで》と妻は言う

帽子もパッチも嫌いなわたしは

ずいぶん長い間
妻の言うことを聞かなかった

(略)

今では妻に言われなくても

帽子もかぶり

パッチもはくようになった

妻は演出家

わたしは妻のダメ出しで動く俳優

鵜飼と魚をとられる鵜だと人は言うが、妻の見守りのおかげで、アルコール依存症も統合失調症も克服してきたというから、愛されてるんですね。

こうしてみただけでも、なんといろんな夫婦像があることか。

相原京子「赤い電車」〔SAGA〕22号

あの人に会いたいなと
思っていた

長い勤めを終え 一区切りがつけば
来し方行く末を 伝えたいと

生き疲れ途方に暮れてた日

夫君出張の日に

私を自宅に招き

日の高いうちからお風呂を立て

美味しい食事を振る舞ってくれた

(略)

結論のない私の繰り言を

顔きながら

ずっと聞いてくれ

駅で、赤い電車が来るのを待ってくれた人は、「またね」と言っておかれてから四十年が過ぎ、今日、訃報が届いたのだ。へ赤い電車に乗って／＼会いに来てくれないかな／＼もちらん私がお尋ねしてもよい／＼「お会いできますか」。これは切ない。取り返しがつかない切なさだ。

詩には、読んでいくと、どうしても引つかかってしまうものがある。はて？と考える。何度も読むうち解ってくる場合もあるし、解らない場合もある。詩はそこが面白いのだ。読み手の領域を残してない面白くない。詩を読んでいるとどんどん想像が膨らみ、ドキドキしてくるような詩が、私は読みたい。

斎藤恵子「北へ行け」(「どうるかまら」30号)

路地のはそ道の電信柱に

白いチョークで書いてある

北へ行け

空は冬晴れ

道ばたの枯草のなか

いっぼんの青草がそよぐ

ほそ道の

そのあたりをわたしは

わけもなく歩いた

北へ行け、とは何を意味するのだろうか。

枯草のなかのいっぼんの青草は？と不思議である。読者にとつてはいろいろにとれる。斎藤恵子さんの詩はいつも面白い。

北口汀子「郷愁」(「RIVIERE」177号)

僕はもう飛べない

飛行機はすでに老いてしまった

デパートの屋上は空の一角だった

どこまでも舞い上がれると思った

昔の夢ばかりがハタハタと僕に手を振る

男の夢の悲哀とでもいうのだろうか。大空を飛んでいたと思っていれば、デパートの屋上だった。でも、飛べたのだからまだいいでしょう。

永井章子「混沌」(「Z記」6号)

道を挟んで斜め向かいのKさんとは

朝のゴミ出しの時によく出会う

そのKさんが昼の二時に小さい用事で訪ねてきた

「そのKですが」

正面から会うKさんはじめて会うKさん

だ

「斜め向かいのKさん?」「はい」

(略)

次の日から斜め向かいのKさんはいなくな

った

かわりに
正面から会ったKさんがゴミを出している

ちよつと視点を変えると起きる面白い混

乱?人間の固定観念を揺らして来る。最後、

〈斜め向かいのKさんは戻ってくるだろう

か〉で終わっている。永井さんの詩は、読ん

でるこちらの感覚を試されているような詩が多

い。

村上大介「舟に乗る」(Les alizes 203号)

流れに乗ると

雲の下

橋の欄干に並び立つ顔

逆光に

表情はわからない

近づくと

もう行くのか と声がする

先に行ったのどうしてここにいるのかと

思う

暗くなつて

橋を抜ける

振り返つても

誰もいないことを

ぼくは知っている

(略)

堤を女が歩いている

最初、流れに乗ると、で舟は空を流れてい
つて、死者になつた自分が橋を上から見下ろ
しているのかと思つた。橋を抜けると、で、
舟は川を流れているのが分かつた。小さなこ
の舟はどこにたどり着くのだろう。

中島悦子「金曜日のアラスカ」(「木立ち」139号)

勲章もののご意見が北風のように通り過ぎ

ていく

今日はアラスカの気分だ。氷と雪だけしか

ない

金曜日はずぐ来る。ふざけているようにこ

ろごろヨーグルトや味噌や食パンが届く。

時々卵は割れている。なぜそんなに金曜日

が早いのですか。呪われたように。金曜

日は。

昨日だつたと思うのに、今日も金曜日です

か。

そうではないのですか。

ここはどこですか

(略)

また金曜日の配達が来る。その配達は私が

自ら一週間生きること望んで決めまし

た。

(略)

なんだから、これはわかりにくい。アラスカ
つて何だろう。わからないなりに理解すれば、
このコロナの閉塞状態がアラスカなのだろう
か、と思う。買い物に出かけられないので食
料は金曜日に届く。生活が何も進まないのに
無慈悲に金曜日だけが来ては食料が届く。も
ともと比喩の多い詩を書く人なので、違った
風を受け取られても、読者の自由というも
のだ。

村野美優「人魚の鱭」(「ひょうたん」74号)

電車の席にすわつて

本のページに視線を落とした

目の前に何か白いものが

ぶら下がっているのが見える

赤ん坊の素足だ

(略)

その小さな足のうらは

地面に着けられたことも

自分の体を支えたことも

まだ一度もないのだ

(略)

それはつい先頃まで

子宮の中を泳いでいた

人魚の鱭なのかもしれない

(略)

発想の展開が面白い。卵で生まれて、水の
中で育ち、肺呼吸に代わる。生物の発生を母
さんのお腹の中で体験するわけだから、まっ
とうといえはそれまでだが、赤ちゃんの足を
見て、鱭を思い出す人はまれで、そこが面白
い。

詩誌になかには、エッセイを載せているも
のが多い。そしてそのエッセイは評価される
場が少ない。感銘を受けたので上げさせてい
ただく。

石川逸子発行「風のたより」22号 高齢にも

かわらず精力的に社会問題に取り組んでおられる姿に感動する。山野上純夫「ヒロシマを生きて―被爆記者の回想」・いだむつつき詩集『硫黄島にて』を詳しく紹介している。

また、「義侠のひと―追悼・泉水博さん」は、突然ダツカ日航機ハイジャック事件で犯人側の釈放リストに入れられ、人質の命を助けるために、出獄し、国外逃亡となり赤軍の仲間さまにまきこまれ、獄に閉じ込められたまま獄死した人、泉水博を悼んだエッセイである。

石毛拓郎個人誌「飛脚」28号・29号にも紹介できないが、力作のエッセイが載っている。

「⁸³」22号 戸谷崗の「修羅」と「自然」―宮沢賢治の彼方とは何処か その9 賢治にとって仏教（法華経）とは何であったのかは、日本における仏教の受容の歴史、賢治にとっての法華経の出会い、父との宗教をめぐる確執など、詳しく書き込まれ、力作であった。

年一回のもの、二回のもの、季刊のもの、隔月のものなどいろいろではあるが二〇〇号をゆうに超すものもあり、長い間引き継がれてきた貴重な同人詩誌であることがわかる。

【受贈詩誌】

「黄薔薇」217号・「りんごの木」58号・「交野ヶ原」91号・「PO」182号・「石ノ森」191・192号・「多島海」39号・「Messier」57号・「RIVIERE」176・177・178号・「ぼとり」62・63号・「CROSS ROAD」17号・「呼吸」150号・「KAIGA」117号・「ア・テンポ」59号・「GAGA」80号・「飛脚」28・29号・「現代詩神戸」274号・「天蚕糸通信」50号・「三重詩人」254号・「いのちの籠」48号・「プライム」53号・「指名手配」3号・「詩遊」70号・「笛」296号・「異郷」57号・「⁸³」22号・「Z記」6号・「ひょうたん」74号・「木立ち」139号・「アリゼ」202・203号・「どうるかまる」30号・「軸」140号・「凜々佳」6号・「栃木県現代詩年鑑」令和3年度版。

